

# 大学図書館における学生のニーズを反映させた 学習支援環境の構築： 平成16年度から平成20年度に長崎大学附属図書館が 実施した学生懇談会の過程と成果

志波原 智 美, 郷 原 正 好, 長 澤 多 代, 柴 多 一 雄

抄録：近年、日本の大学において、学生の希望や意見を大学の運営に反映させることの重要性が指摘されるようになった。本稿の目的は、長崎大学附属図書館が平成16年度から平成20年度に実施した学生懇談会において明らかになった学生の希望や意見をもとに、附属図書館の学習支援環境を整備してきた過程とその成果を報告することである。施設・設備、資料、サービスなど多方面にわたって学習支援環境を整備した結果、学生の利用満足度が高まったり、附属図書館の利用者数が年々増加したりしていること、更には、学生がより発展的なサービスを期待するようになっていくことが明らかになった。

キーワード：学習支援環境、学習支援機能、学生懇談会、長崎大学附属図書館、大学教育改革

## はじめに

国立大学の法人化後、大学の運営は、各大学の特色や個性を反映させて、長期的には6年間の中期目標・計画、短期的には年度目標・計画に沿って、教育、研究、社会貢献に取り組むものとなった。その中で、学生の希望や意見（以下、ニーズという）を大学の運営に反映させることの重要性が政策面においても指摘されるようになり、在学生や卒業生を対象として実施した懇談会やアンケート調査の結果を大学の運営や教育活動に反映させる動きが見られるようになった<sup>1)</sup>。

本稿の目的は、長崎大学附属図書館（以下、附属図書館という）が、学生のニーズをその運営に反映させるために学生懇談会を実施した経緯、平成16年度から平成20年度に実施した学生懇談会において明らかになった学生のニーズ、そしてこのニーズをもとに学習支援環境を整備してきた過程とその成果を報告することである。

全体は6章からなる。第1章では、学生支援の概要、大学図書館が実施する学生のニーズの把握の現状を整理して示す。第2章では、附属図書館の概要と学生懇談会の実施の経緯及びその運営体制について説明する。第3章では、学生懇談会によって明らかになった学生のニーズとこれを学習支援環境の整備・充実に結びつけた取り組みの全容を説明する。第4章では、グループ学習室及び開館日・開館時間に焦点をあて、整備・充実のプロセスとその成果を説明する。第5章では附属図書館における学習支援環境の整備を可能にした要因を説明し、第6章では今後の課題を述べる。

## 1. 「学生中心の大学」への転換

### 1.1 学生の立場に立った大学づくり

学生のニーズを大学の運営に反映させることの重要性は、政策面でも指摘され支援されている。平成12年6月に大学における学生生活の充実に関する調査研究協力者会議が出した「大学における学生生活の充実方策について（報告）：学生の立場に立った大学づくりを目指して」<sup>2)</sup>では、18歳人口の減少を背景として、大学間の学生獲得競争が激化すること、各大学はそれぞれの特色を生かした教育のあり方を検討する必要があることを指摘し、その中で、「大学はより学生の視点に近い位置に立ち、学生に対する教育・指導の充実やサービス機能の向上に努めること」が重要になると述べている。また、「「学生中心の大学」への転換を図るという観点から、大学教育においては、大学で教育を受ける学生の希望や意見を、適切に大学の運営に反映させることが重要である」とも指摘している。

そして、文部科学省は、平成19年度・平成20年度に「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」（学生支援GP）<sup>3)</sup>として、学生支援に関する多様な取り組みを支援している<sup>4)</sup>。

### 1.2 大学図書館が実施する学生のニーズの把握

学生のニーズを大学の運営に反映させることの重要性が指摘される中で、これを図書館の運営に反映させようとする取り組みも見られるようになった。その現状について、国立の大規模大学及び中規模大学を対象とする独自の調査の結果をもとに説明する<sup>5)</sup>（表1）。

表1 図書館に関する学生のニーズを把握する方法

調査大学	実施内容	実施大学
国立の大規模大学 (7大学) ※旧帝国大学	学生懇談会の実施	2 大学 (名古屋大, 九州大)
	図書館サービスに関するアンケートの実施	4 大学 (北海道大, 東北大, 東京大, 名古屋大)
	図書館勤務の学生アルバイトからの図書館サービスに関する意見収集	2 大学 (東京大, 名古屋大)
	学生ニーズ調査結果の利用形態	
	・ 予算要求に利用	3 大学
	・ 図書館サービスの改善に利用	6 大学
国立の中規模大学 (17大学) ※医学部を有する 6学部以上の大学	学生懇談会の実施	7 大学 (信州大, 神戸大, 山口大, 岡山大, 長崎大, 鹿児島大, 琉球大)
	学生懇談会の実施 (分館)	2 大学 (長崎大, 鹿児島大)
	医学部学生との懇談の実施 (分館)	2 大学 (金沢大, 琉球大)
	図書館サービスに関するアンケートの実施	9 大学 (信州大, 広島大, 山口大, 香川大, 愛媛大, 長崎大, 熊本大, 鹿児島大, 琉球大)
	図書館勤務の学生アルバイトからの図書館サービスに関する意見収集	9 大学 (山形大, 千葉大, 信州大, 広島大, 山口大, 愛媛大, 長崎大, 鹿児島大, 琉球大)
	学生ニーズ調査結果の利用形態	
	・ 予算要求に利用	8 大学
	・ 図書館サービスの改善に利用	15 大学
	・ 学内広報に利用	7 大学

旧帝国大学等の大規模大学 (7 大学) では、アンケート調査によって学生のニーズを明らかにしている大学があることがわかった (4 大学)。これは、学生懇談会を実施して図書館に関する学生のニーズを明らかにしたり (2 大学)、図書館でアルバイトをする学生から図書館サービス等に関する感想を得たり (2 大学) する取り組みよりも多い。

6 学部以上かつ医学部を有する中規模大学 (17 大学) では、学生懇談会を実施して図書館に関する学生のニーズを明らかにするのは 7 大学であった。これは、図書館でアルバイトをする学生から図書館サービスに関する感想を得たり (9 大学)、図書館サービスに関するアンケート調査を実施したり (9 大学) するのと同程度である。

以上より、限られた範囲ではあるが、何らかの方法によって学生のニーズを明らかにしようとしている大学図書館が少なくないことがわかった。

## 2. 長崎大学附属図書館と学生懇談会

### 2.1 長崎大学の概要

長崎大学は、約 7,600 名の学士課程の学生、約 1,400 名の大学院生、約 1,100 名の教員、約 1,400 名の職員からなる<sup>6)</sup>。キャンパスは、文教地区、坂本地

区、片淵地区という長崎市内の 3 地区に分散している。文教地区には 5 学部 (教育学部、薬学部、工学部、環境科学部、水産学部)、坂本地区には 2 学部 (医学部、歯学部)、片淵地区には 1 学部 (経済学部) があり、各学部は関連する研究科をもつ。附属図書館としては、文教地区に中央図書館があり、坂本地区に医学分館、片淵地区に経済学部分館がある。

長崎大学は、その運営方針に「学生顧客主義」を掲げている。平成 15 年 3 月には、学長 (当時は、齋藤寛学長) が、学生のニーズに直接耳を傾けるために、各学部の卒業生の代表者と懇談会を行った。懇談会後の学長のコメントとして、「自ら学生と対話するのは、学生紛争以来、初めてのようである」、「学生参加のもと、学生が持つ能力を最大限に伸ばすことのできる大学を作ることが重要である」<sup>7)</sup>があった。長崎大学では、国立大学の法人化以前にも、学長自身の提案によって、学生のニーズを反映させる大学運営の試みが始まっていた。

### 2.2 長崎大学附属図書館の運営方針

附属図書館では、中期目標・計画の「教育の実施体制等に関する目標」、「学生への支援に関する目標」として「教育環境の整備に関する基本方針」、「学生

への学習支援に関する基本方針<sup>8)</sup>を掲げ、附属図書館の利用状況と学生のニーズを的確に把握した上で教育の充実及び活性化のための支援、学生の修学・生活のための支援に取り組むことを目指している。

平成16年度の計画には、「学生と学長、学生と図書館長及び分館長、その他各学部での懇談会を計画的に開催」<sup>9)</sup>することを設定し、平成17年度よりこれを本格的に実行している。具体的には、医学分館及び経済学部分館における学生懇談会、中央図書館のある文教地区にある各学部の学生懇談会を開催した後に、文教地区全体の学生懇談会を開催するという仕組みを構築した。これによって、附属図書館に関する学生のニーズを全学的に把握するための体制が整ったと言える。

### 2.3 学生懇談会の実施の経緯

学生懇談会の始まりは、平成15年度に医学分館、経済学部分館において各分館長が学生懇談会を実施したことである。

医学分館では、各学年から1名ずつ選出した計6名の学生を学生図書委員に任命している。学生図書委員の役割は、グビロが丘文庫という同窓生が寄贈した資料や卒業生からの寄付金によって購入した図書を中心とする文庫の選書と運営を支援することである。平成15年11月に、学生図書委員と医学分館長、医学分館の医学情報係長、電子情報係長が、学生用図書の選書<sup>10)</sup>やグビロが丘文庫の運用について約1時間の懇談会を行った。その後、附属図書館全体の運営について自由に意見交換をする中で、学生のニーズとして、資料の管理、資料の充実、貸出期間の延長、学生のニーズを収集する箱の設置などがあることが明らかになった。

経済学部分館では、同じ時期に、経済学部分館長が大学院生を含む5名の学生を対象として約1時間の懇談会を行った。ここでは、研究室に貸出された資料の利用、蔵書検索や文献検索、施設や蔵書に関するニーズが明らかになった。そして、経済学部分館長と情報サービス課長がその場でこれらのニーズへの対応の可能性について回答した。ここでは、平成15年7月より実施していた開館時間の延長(20時から21時30分への変更)やこの学生懇談会を開催したことについて、学生が評価していることもわかった<sup>11)</sup>。

平成16年12月には、中央図書館にとって第1回となる学生懇談会を実施した。参加者は、中央図書館と同じ文教地区にある5学部から選出された計13名の学生、図書館長、文教地区委員協議会の委員

長<sup>12)</sup>である。司会は図書館情報学を専攻する大学教育機能開発センターの教員である。学生懇談会では、最初に、参加した学生が自己紹介をするとともに附属図書館に関するニーズを述べ、次に、ここで学生が提示したニーズを全員で検討した。

ここから、蔵書の充実、開館時間の延長、施設・設備面の改善など、多様なニーズがあることが明らかになった。中央図書館で実施した学生懇談会は、各分館で実施したものとは異なり、参加した学生の属性が、文系と理系、1年生から大学院生までなど多様であった。所属する学部や学年が異なることによって学習のパターンや必要と考える資料の種類が異なるために、学生の間で、お互いのニーズを理解できず議論が深まらないという場面も見られた。

平成15年度及び平成16年度に実施した学生懇談会において明らかになったニーズについては、附属図書館の関係者が実現の可能性を即座に検討し、可能だと判断したニーズについては速やかに実現させた<sup>13)</sup>。

### 2.4 学生懇談会の運営

附属図書館では、平成15年度及び平成16年度に各館で実施した学生懇談会の結果をもとに、平成17年度より総合的な年間のスケジュールを設定して、学生懇談会を実施するようにした。

医学分館及び経済学部分館における学生懇談会の実施方法等については、司会等についても分館長が行うなど従来どおり各分館長の主導によって実施するようにしている。

参加対象となる学生を選出する方法は、医学分館では、学生図書委員(医学部、歯学部、医歯薬学総合研究科の中から各学年1人)への依頼である。経済学部分館では、分館の運営委員会の委員による推薦等である。参加する学生やその推薦者との事務連絡及び議事録の作成など事務的な業務を担うのは、医学情報担当、経済情報担当の図書館員である。

中央図書館では、学生懇談会を開催して2年目になる平成17年度から、文教地区全体で実施する学生懇談会の前に、学部毎に学生懇談会を実施することとした。このような仕組みにした理由は、同じ学部の学生であれば、学習方法、学習の時間帯、必要とする資料などに共通する部分が多く、相互の理解や共感が得られやすいのではないかと予想したためである。また、この相互理解や共感が得られることによって、個々の学生が自分の経験や考えを率直に提示しやすくなって活発な意見交換となること、多くの学生が参加するためにより幅の広いニーズが明らかになることを期待したためである。

この仕組みによって実施した結果、期待していた効果に加えて、同じ学部先輩と後輩という認識によってより興味深く質問や意見交換ができることがわかった。また、文教地区全体の学生懇談会では、参加者がそれぞれ各学部の代表という自覚を強く持っていたために、他の参加者と異なる意見であっても、各学部の学生懇談会における議論に裏打ちされた意見を臆せず提示し、話題の幅が広がるという効果があった。

各学部における学生懇談会の開催については、各学部が選出する図書館委員会の委員である教員に図書館長が要請した。実施方法等については、各学部の図書館委員の裁量に任せているために、学部が独自に任命した図書委員等が計画・実施する学部もある。

参加対象となる学生の選出の方法は、中央図書館のある文教地区では、学部によって、また、実施年度によっても異なる。工学部では、各学科の図書館委員が参加者を推薦するなど、全学科から学生が参加するような仕組みになっている。教育学部では、学士課程と大学院課程の各学年から1～2名が参加するようにしている。薬学部と水産学部では、実験等が多く参加者の選出が困難であるために、事前にアンケート調査などによって意見を収集して、学部で実施する学生懇談会の代わりにすることもあった。その場合には、図書館委員が推薦した学生がこのアンケート調査の結果を持って文教地区の学生懇談会に参加した。環境科学部では、平成18年度までは学部の学生支援を担当する教員に学生懇親会の実施を委嘱していたが、平成19年度以降は図書館委員が直接実施するようになった。参加する学生は、実施担当教員の直接の呼びかけにより集まる当初の形から、平成20年度には学部内の複数の教員の呼びかけにより集まる形に変わっている。全体的に学生懇談会の参加者は、図書館委員から依頼を受けた教員からの呼びかけによって集まった学生が多いようである。

各学部が主催する学生懇談会の会場として各学部が所管する会議室等を使用することが多いが、附属図書館内にある会議室を使用することもある。また、どの会場においても、記録をとったり、学生による図書館サービスに関する質問に答えたりするために、約2名の図書館員が陪席している。

各学部が主催する学生懇談会の数週間後に、文教地区全体の学生懇談会を開催している。全体の学生懇談会の参加者は各学部が主催する学生懇談会の参加者の中から選出された代表（2名程度）を中心としているが、他の学生が参加する場合もある。

以上が、第2回の学生懇談会（平成17年度）のために変更した主な点である。その他の運営については、2.3で紹介した第1回の学生懇談会と同様である。ただし、事務的な作業について、第1回の学生懇談会のときには試行的な行事として課長が執り行ったが、平成17年度からは主査5～6名によるワーキンググループを組織して、連絡調整や記録作成などを行っている。

## 2.5 実施のスケジュール

学生懇談会を年間行事とした平成17年度の学生懇談会の実施のスケジュールは下記のとおりである。

- 10月7日 医学分館の学生懇談会
- 10月17日 経済学部の学生懇談会
- 10月18日 工学部の学生懇談会
- 10月20日 教育学部の学生懇談会
- 10月20日 薬学部・水産学部合同の学生懇談会
- 10月24日 環境科学部の学生懇談会
- 11月24日 文教地区の学生懇談会

10月以降に学生懇談会を実施する理由は、前期の授業、試験、夏季休業期を経て、それぞれの学習と生活のシーンにおける図書館利用の経験をもとに、学生自身がニーズを把握できる時期であると考えためである。

## 2.6 運営上の要点

学生懇談会の運営について図書館長が重視したことは、「図書館長が学生懇談会の場で具体的な対応を約束する」ことであった。学生にニーズをたずねるだけでなく、決定権のある図書館長が、学生懇談会の場で「グループ学習室を設置する」、「開館時間を延長する」などの実行を約束することが重要であると考えた。そのために、情報管理部門、情報サービス部門の図書館員（当初は各課長）が各1名列席して、学生懇談会の場で、図書館長から予算の確保やサービスの改善について直接指示を受ける体制を整えた。医学分館、経済学部分館においても、分館長がそれぞれの権限のもとで対応できることを答えた<sup>14)</sup>。

## 2.7 進行上の工夫

中央図書館（文教地区全体）の学生懇談会において、学生の自由な発言を引き出すために、司会、茶菓の用意、列席者について特別の配慮をした。

平成16年度から平成19年度までの司会は図書館

情報学の専攻教員が担当した。その理由は、大学図書館が提供する学習活動の支援について個別の事例を超えた一定の見解を持っているためである。また、附属図書館の所属ではないために中立的な立場で学生のニーズに耳を傾けられること、管理職にある図書館関係者と比べて学生と歳が近かったために学生を萎縮させないことを期待したためである。

茶菓を用意した理由は、学生懇談会から、会議のような堅苦しい雰囲気を感じ、茶話会の気分で自由な発言を引き出すことをねらったためである。

列席者については、図書館関係者の数を限定した。図書館長、図書館委員会の委員代表の教員に加えて、進行記録と図書館サービスの細かい点を確認するために約2名の図書館員が陪席するが、これ以上が列席しないこととした。また、日常的にカウンターで

業務を担当する図書館員が列席することによって学生の自由な意見を妨げることを懸念し、これを避けた。更には、図書館員の席を司会者と対角の位置に設けることによって学生の視界から列席者を遠ざけ、圧迫感を与えないようにした。

### 3. 学生懇談会における学生のニーズと附属図書館の対応

学生懇談会において明らかになった学生のニーズが妥当であると判断した時には、可能な範囲で速やかに実現させた。また、運用面で工夫をすることによって対応できると判断したニーズについては、図書館長の指示のもとに直ちに実現させた(表2)。

学生懇談会によって明らかになった学生のニーズは、施設・設備、資料、サービスに分類することが

表2 学生懇談会の開催一覧、および主な改善事例(平成15年度～20年度)

実施館の略称:【中】中央図書館,【医】医学分館,【経】経済学部分館,【全】3館共通

年度	日程	学生懇談会開催 (参加学生数)	改善事例(実施順)
H15	11.13 11.26	【医】医学分館(6名) 【経】経済学部分館(5名) 計2回(11名)	【経】書庫内の禁帯出図書の館外貸出の一部実施 【医】要望箱の設置 【経】書架案内の改善(主題の表示) 【経】貴重資料(武藤文庫)展示室の設置
H16	12.13 1.25	【中】中央図書館(13名) 【医】医学分館(5名) 計2回(18名)	【医】日曜・祝日開館の開始(10:00～17:00) 【全】シラバス掲載図書の網羅的な購入 【全】学生希望図書制度の改善(予算増,スピードアップ) 【医】貸出冊数・期間の改善(冊数:3冊→5冊,期間:1週間→2週間) 【経】貸出冊数の改善(3冊→5冊) 【中】【医】貴重資料展示室の設置 【中】グループ学習室の設置(利用可能人数:約6名) 【中】パソコンの増設(31台→52台)
H17	10.7 10.17 10.8 10.20 10.20 10.24 11.24	【医】医学分館(9名) 【経】経済学部分館(7名) 【中】工学部(9名) 【中】教育学部(10名) 【中】薬学部・水産学部(20名) 【中】環境科学部(3名) 【中】中央図書館(11名) 計7回(69名)	【全】ミニサイズの開館カレンダーの配布開始 【全】学生用図書の充実(予算増額) 【中】サービスカウンターの改善 【中】開館時間の延長(9:00～20:00→9:00～21:45) 【中】書庫内の図書の貸出手続の簡略化 【中】冷房時間の延長(17:00→21:00) 【医】グループ学習室の設置(利用可能人数:約20名) 【中】コイン式複写機(プリンター兼用)の増設 【全】携帯電話による蔵書検索サービスの開始 【全】Web,携帯電話による貸出状況確認サービスの開始 【全】お知らせメールサービスの開始 【中】グループ学習コーナーを整備(メディアサロン内,24席) 【全】パソコンの増設(中央図書館52台→70台,医学分館8台→22台,経済学部分館6台→10台)
H18	10.17 10.30 10.30 10.31 10.31 12.12	【医】医学分館(10名) 【経】経済学部分館(6名) 【中】環境科学部(6名) 【中】教育学部(10名) 【中】工学部(7名) 【中】中央図書館(9名)	【全】中央図書館及び2分館間の資料配送サービスの開始 【全】学生用図書の充実(予算増額) 【中】シラバス掲載図書の購入冊数の変更:各1冊から2冊へ 【中】休業期の土日祝日開館の実施(10:00～17:00) 【中】開館時間の延長(9:00～21:45→8:40～21:45) 【全】Web,携帯電話による貸出予約サービスの開始 【経】開館時間の延長(9:00～21:45→9:00～22:15) 【経】トイレの改修,多目的トイレの設置 【経】グループ学習スペースの設置(利用可能人数:約12名) 【医】グループ学習室の再整備(可動式間仕切りの設置(利用可能人数:大

大学図書館における学生のニーズを反映させた学習支援環境の構築

			約10名、小ー約5名)) 【医】視聴覚コーナーの充実 【医】古い医学書の撤収と新刊書の重点的な購入 【全】背ラベルへの著者記号の採用、全館の様式の統一 【中】利用希望のある研究室所蔵図書の学生用図書としての購入 【中】AVコーナーの充実(2人用席の増設、機器更新) 【経】空調設備の改修(2階部分)
		計6回(48名)	
H19	10.20 10.25 10.26 10.31 10.31 11.28 12.14	【中】薬学部(4名) 【中】環境科学部(4名) 【医】医学分館(9名) 【中】教育学部(10名) 【中】工学部(6名) 【経】経済学部分館(6名) 【中】中央図書館(7名)	【全】利用者用プリンターのオンライン出力方式への変更 【中】軽雑誌コーナーの再整備(ソファの配置等によるリフレッシュ空間化) 【全】学生希望図書制度の改善(1名あたり単年度3冊→5冊) 【経】開館時間の延長(9:00~22:15→8:40~22:15) 【中】ライブラリーラウンジの新設(グループ学習向けミーティングテーブル:32席、カウンター席:12席、ラウンジ席:9席) 【中】増床による閲覧席の増加(約100席) 【経】日曜日の開館時間の延長(13:00~17:00→10:00~17:00) 【中】【経】試験期における土日の開館時間の延長(10:00~17:00→10:00~18:30) 【中】試験期間中における閲覧席の臨時的増設 【全】学生希望図書制度の改善(用紙の改善、Web受付の開始) 【中】暖房時間の延長(16:00→21:00) 【医】開館時間の延長(9:00~21:00→8:40~21:00) 【中】利用希望のあった研究室図書の学生用図書としての購入 【中】【医】DVDソフトの充実(中央館約170タイトル、医学分館約40タイトル) 【中】【経】図書の貸出更新の制限の緩和(更新1回のみ→2回まで可) 【中】選書ツアーの実施
		計7回(46名)	
H20	11.9 11.12 11.19 11.26 12.4 12.16 12.17 12.19 1.14	【医】医学部医学科(10名) 【経】経済学部分館(10名) 【医】歯学部(6名) 【医】医学部保健学科(6名) 【中】薬学部(4名) 【中】工学部(10名) 【中】教育学部(8名) 【中】中央図書館(8名) 【中】環境科学部(9名)	【経】DVD閲覧可能なパソコンへの更新・増設(4台) 【中】DVDドライブの館内貸出の実施 【中】開館時間の延長(8:40~21:45→8:40~22:00) 【中】土日祝日の開館時間の延長(10:00~17:00→10:00~18:30) 【経】【医】書庫の照明の改善 【中】【経】長期休業期間中における貸出冊数の引き上げ(5冊→10冊) 【医】開館時間の延長(8:40~21:00→8:40~22:00) 【医】土日祝日の開館時間の延長(10:00~17:00→10:00~18:30) 【経】祝日および休業期における日曜日の開館の実施(通常期:10:00~18:30、休業期10:00~17:00) 【中】学生の貸出冊数上限の引き上げ(開架図書と書庫内の図書の合計5冊→開架図書5冊+書庫内の図書10冊) 【全】若手職員による図書館ブログの開設 【中】館内におけるテーマ展示の開始 【経】DVDソフトの充実(約80タイトル) 【経】グループ学習スペースへの情報コンセントの設置 【医】【経】AV機器の更新・増設 【中】【経】空調設備の更新(中央図書館本館、経済学部分館1階部分) 【中】外階段の改修(手すり、防護板の設置) 【中】グループ学習室1室の増設(利用可能人数:約12名)
		計9回(71名)	

H15年度～H20年度計33回(263名)

学生懇談会の開催および改善事例については、『和華蘭の窓：長崎大学附属図書館報』に報告している

No.94(2005年3月)、No.95・96(2006年1月)、No.99(2006年11月)、No.100(2007年2月)、No.103(2008年2月)、No.105・106(2009年2月)

できる。3.1以降でその詳細を説明する。文中の( )内の年度は学生のニーズが明らかになった年度、〔 〕内の年度はこれを実現に結びつけた年度である。

### 3.1 施設・設備関係のニーズとその対応

施設・設備関係の主なニーズとして、座席数、グループ学習のための場、複写機・プリンター、パソコンに関するものがある。

座席数について、「試験期間中は座席が足りないので増設してほしい」(平成16年度～平成20年度・

中央図書館、平成19年度・医学分館)というニーズがあった。これを実現するために、中央図書館に隣接して建築された放送大学と長崎大学の合築棟(4階建て)の2階部分(457m<sup>2</sup>)を附属図書館の閲覧スペースとして利用することにした。その結果、約100席分の閲覧座席を中央図書館に増やすことができた〔平成19年度〕。更に、中央図書館では、試験期間中に、会議用の机や椅子を転用して、一時的に座席を増設するようにした〔平成19年度〕。

また、「グループで学習できるスペースがほしい」(平成17年度・医学分館)、「分館内にグループ学習

室がほしい」(平成17年度・経済学部分館)というニーズも明らかになった。これを実現するために、中央図書館では、法令資料室(17m<sup>2</sup>)をグループ学習室(利用可能人数:約6名)として利用できるように整備したり〔平成16年度〕、閲覧室の一部を改装してグループで学習できる空間を整備したりした〔平成17年度〕。また、医学分館にグループ学習室を新設したり〔平成17年度〕、経済学部分館にグループ学習スペースを整備したりした〔平成18年度〕。グループ学習のための場については、4.1で詳しく述べる。

パソコンについて、「インターネットに接続されたパソコンを増やしてほしい」(平成16年度・中央図書館)、「パソコンが古いので、新しくしてほしい」(平成17年度・中央図書館)、「USB対応のパソコンにしてほしい」などのニーズがあった。これを実現するために、中央図書館では、学生用のパソコンを管理している情報メディア基盤センターの協力を得て21台のパソコンを増設した〔平成16年度〕。その後、同センターによる契約更新の際に、これらのニーズを勧案して、図書館内で利用できるパソコンをUSB対応の機種に更新するとともに、その数を約1.5倍に増設した(中央図書館:52台→70台、医学図書館:8台→22台、経済学分館:6台→10台)〔平成17年度〕。

複写機・プリンター関係のニーズとして、「複写機を増設してほしい」、「3階に複写機を設置してほしい」(平成17年度・中央図書館)、「オンラインで出力できるプリンターを設置してほしい」(平成18年度・中央図書館)などがあった。これを実現するために、中央図書館では、生協と協議して既設のコイン式複写機(プリンター兼用)1台に加えて、雑誌の閲覧コーナーに近い場所にある情報コンセントルーム(136m<sup>2</sup>)にコイン式複写機を設置した〔平成17年度〕。また、図書館内の学生用プリンターへの出力方式を、それまでの専用パソコンから出力するスタンドアロンの方式から、学生用パソコンから直接オンラインで出力する方式に変更した〔平成19年度〕。

施設・設備関係の他のニーズとして、「夜間の開館時の冷暖房を入れる時間を延長してほしい」(平成17年度・平成18年度・中央図書館)、「夏に冷房が入っていても(特に2階の)閲覧室が大変暑いので、改善してほしい」(平成17年度・平成18年度・経済学部分館)、「トイレの音や臭いが気になる」(平成15年度～平成17年度・経済学部分館)などがあった。これらに対応するために、中央図書館では、冷房を切る時間を17時から21時に延長した〔平成

17年度〕。また、文教地区の集中ボイラー方式に拠っていたために附属図書館独自の運用ができず対応が遅れた暖房についても、集中ボイラーの廃止に伴う暖房の館内設備への切り替えを機に、16時から21時に延長した〔平成19年度〕。経済学部分館では、故障していた空調機を更新したり〔平成18年度〕、トイレを改修したりした〔平成18年度〕。

### 3.2 資料関係のニーズとその対応

資料関係の主なニーズとして、蔵書の充実、学生用の希望図書制度、AV資料に関するものがある。

蔵書の充実に関するニーズはどの学生懇談会においても顕著であった。主なニーズとして、「蔵書の充実が最も重要だと思う」(平成16年度・中央図書館)、「授業で課題が出た時に利用できる図書の冊数が少ない」(平成17年度・中央図書館)、「研究室にしか所蔵されていない図書を図書館にも置いてほしい」(平成16年度・平成17年度)、「ベストセラーがほしい」(平成17年度～平成20年度・中央図書館)、「図書が古い」(平成15年度～平成20年度・全館)がある。学生が利用できる図書を増やすために、シラバスに掲載された図書を優先的に購入する制度を確立したり〔平成16年度〕、シラバスに掲載された図書の購入冊数を1冊から2冊に変更したりした〔平成18年度〕。また、研究室貸出の図書に関するニーズに対応するために、利用申し込みがあった図書を学生用図書として購入して開架図書としたり〔平成18年度〕、ベストセラーに関するニーズにも対応できるように学生希望図書(リクエスト)制度を充実させたりした〔平成16年度〕。また、図書が古いという問題を解決するために、学生用図書費を増額した。平成17年度には、中央図書館に配架する図書の受け入れ冊数を前年度までの1,528冊から3,077冊へと大幅に増加させ、平成18年度には、4,382冊へと更に増加させた〔平成17年度～平成18年度〕。医学分館では、教員の協力を得て開架書架から古い医学書を撤収し、撤収した旧版の図書に代わる最新版の図書や新刊書を重点的に購入して配架することによって、開架書架の図書を更新した〔平成18年度〕。

学生希望図書制度に関するニーズとして、「学生希望図書の即時購入の上限(1名あたり単年度3冊)をなくしてほしい」(平成18年度・中央図書館、経済学部分館)があった。これについては、予算を増額し、即時購入の上限を1名あたり単年度5冊に変更した〔平成19年度〕。また、「リクエストを記入する用紙が堅苦しい」(平成19年度・中央図書館)という意見があったので、リクエスト用紙のタイト



ルやデザインを明るく親しみやすいものに変更した〔平成19年度〕。

他に、「資料の配列をわかりやすくしてほしい」（平成15年度・経済学部分館ほか多数）というニーズがあった。これに対応するために、背ラベルに記載する請求記号として、分類記号に加えて2段目以下に表示する記号が各分館等で異なっていたが、全館において分類記号と日本著者記号表による著者記号を使用するように統一した〔平成18年度〕。

AV資料に関する主なニーズとして、「医学系ドキュメンタリーの映像資料がほしい」（平成17年度・医学分館）、「映画のDVDを充実してほしい」（平成18年度・中央図書館）、「ビデオ・DVDの機器を増加してほしい」（平成17年度～平成19年度・医学分館）がある。これを実現するために、中央図書館では、映画、ドラマ、ドキュメンタリー、教養番組などのDVD資料を充実させたり、DVD・VHS視聴用のモニターやプレーヤーを更新したり、2名で利用できるAVブースを増設したりした〔平成18年度〕。経済学部分館、医学分館についても、年度毎に館を定めて重点的にソフトを充実させたり、機器を更新したりした〔平成19年度～平成20年度〕。

### 3.3 サービス関係のニーズとその対応

サービス関係の主なニーズとして、開館日・開館時間、貸出サービス、Webや携帯電話を利用したサービスに関するものがある。

開館日・開館時間に関しては、「夜遅くまで開館してほしい」（平成16年度・中央図書館、平成17年度・経済学部分館ほか）、「1限目が始まる前に開館してほしい」（平成17年・中央図書館ほか）、「休業期の土日でも開館してほしい」（平成17年・中央図書館）、「できれば24時間開館にしてほしい」（平成18年度・医学分館ほか）など、常に多くのニーズがある。開館時間の延長については、平成15年度から段階的に実施している。平成21年4月現在では、学期期間中の月曜日から金曜日（祝日を除く）については、中央図書館、医学分館では8時40分から22時まで、経済学部分館では8時40分から22時15分までを開館時間としている。土・日・祝日、休業期の開館時間についても、3館とも延長をしている。開館時間の延長の詳しい経緯については4.2で述べる。また、「図書館の開館時間の予定表を小さい紙に印刷して配布してほしい」（平成16年度・中央図書館）というニーズに対応するために、A4サイズだった開館カレンダーを、財布などに入れやすいミニサイズにして配布するようにした〔平成17年度〕。

貸出サービス関係のニーズとして、「一度に貸出

できる冊数を増やしてほしい」（平成17年度、平成19年度・経済学部分館、平成18年度、平成19年度・中央図書館）、「貸出期間を長くしてほしい」（平成15年度・医学分館、平成18年度、平成20年度・中央図書館）、「借りた図書をどの館でも返却できるようにしてほしい」、「中央図書館と両分館の間で資料を配送してほしい」（平成17年度・中央図書館、経済学部分館）などがあった。医学分館では、図書の貸出冊数の上限は3冊であり、貸出期間は1週間以内であった。これを中央図書館と同じ5冊、2週間以内に引き上げた〔平成16年度〕。続いて経済学部分館でも、貸出冊数の上限を3冊から5冊に引き上げた（貸出期間は以前から2週間であった）〔平成16年度〕。その後の改善については、貸出冊数、貸出期間ともに現状を適当とする意見もあったために慎重に検討していたが、中央図書館における書庫内図書について、開架図書とは別に10冊借りられるようにした〔平成20年度〕。更には、中央図書館と経済学部分館では夏休み等の長期休業期に限って、開架図書の貸出冊数の上限を5冊から10冊に引き上げた〔平成20年度〕。また、中央図書館と両分館で貸出・返却資料を配送することについては、新着図書・雑誌の配送のシステムや学内便を活用してサービスを開始し、3つの図書館のどこにおいても他館の資料の貸出・更新・返却ができるようにした〔平成18年度〕。

Webや携帯電話を利用したサービス関係のニーズとして、「携帯電話によるサービスを充実させてほしい」（平成17年度・中央図書館）、「携帯電話で図書館関係のお知らせが届くとよい」（平成17年度・中央図書館）、「Webから図書を予約できるようにしてほしい」（平成17年度・中央図書館）などがあった。そこで、携帯電話から蔵書検索をできるようにし〔平成17年度〕、Webや携帯電話から自分が借りている図書や予約の状況を確認できる「貸出状況確認サービス」を導入した〔平成17年度〕。また、図書館からのお知らせを配信する「お知らせメールサービス」を開始し〔平成17年度〕、Webや携帯電話から貸出予約ができるようにした〔平成18年度〕。

これ以外に、「職員がいつも忙しそうで声をかけにくい」（平成16年度・中央図書館ほか）、「職員に笑顔があったらいい」（平成17年度・中央図書館）、「月ごとのテーマ展示などがあるとよい」（平成18年度・中央図書館）、「新しい設備やサービスについてしっかりと広報してほしい」（平成19年度・中央図書館、経済学部分館ほか）など、職員と利用者との距離感、広報に関する問題が明らかになった。こ



の状況を改善するために、中央図書館のサービス部門では、職員が自席で待機する従来の体制からローテーションによって参考調査用のカウンターと貸出用のカウンターの両方で常時利用者を待ち受ける体制に変更した〔平成17年度〕。また、若手の職員の企画による中央図書館内のミニテーマ展示を実施したり〔平成20年度〕、ブログによる情報発信を開始したりして<sup>15)</sup>〔平成20年度〕、サービス部門だけでなく、学生との接点を日常的に持たない管理部門の職員も含めて、利用者との距離を縮めるための方策を模索している。

#### 4. 学習支援環境の改善の事例

第4章では、第3章で列举した学生のニーズとその対応のうち、グループ学習のための場及び開館日・開館時間に焦点をあてて、その改善のプロセスと成果を説明する。

##### 4.1 改善の事例：グループ学習のための場

###### 4.1.1 学生のニーズに対応した最初の取り組み

平成16年度より、各館の学生懇談会において明らかになった共通のニーズとして、「グループ学習ができる場所がほしい」、「その設備を充実させてほしい」がある。これを実現するために、各館はともに、グループ学習のための場を整備した。

中央図書館では、平成17年3月に、館内の閲覧室に隣接する旧法令資料室（17m<sup>2</sup>）をグループ学習室として利用することとし、新しいドアを設置し、会議室等で使用していた机と椅子を転用することによって整備をした。この部屋は、壁面の3方には法令資料の書架があるために狭くなっており、椅子も6脚しかなく1グループしか利用できなかった。グループ学習のための理想的な場であるとは言えなかったが、附属図書館が学生のニーズに対応している姿勢を示すことが先決であると考え、最小の予算と期間で可能な方法を選択することにより、学生懇談会で明らかになったニーズを同一年度内に実現することができた。平成17年度にこの部屋を利用したのは267組（1,064名）で、まずまずの利用があったことができる。だが、利用した学生の指摘により、部屋が狭い、空調がない、1室だけでは十分ではないという問題が明らかになった。特に、ドアで仕切られた学習室に空調がなかったために、扇風機や電気ストーブを貸出して対応していたが、空調がないことを知って利用をあきらめる学生も多かった。

中央図書館において利用できるグループ学習室が1室だけで、そこに空調がない状態では、学生の

ニーズに十分に応えているとは言えない。そのために、平成17年12月に、中央図書館の入口付近にあった旧雑誌閲覧室をメディアサロンとして改装し、サロン内の一角にある閲覧席（24席分）をグループ学習コーナーとして会話や相談ができるようにした。この部屋には、パソコンコーナー、AVコーナー、新聞コーナー等があるために、多様なメディアの情報を利用しながらグループワークができる場となった。また、パソコンの操作音等の音源が多いために、静寂を要しない空間としてグループ学習のための場とすることに問題はないと考えた。だが、利用状況を観察すると、複数名が利用できる閲覧机を1人で利用する学生が多いためにグループでまとまって席を確保するのが難しい、グループ毎のプライバシーを確保するのが難しいなどの問題が明らかになり、グループ学習のための場として有効に利用できないことがわかった。

中央図書館に続いて、分館のグループ学習のための環境を整備した。平成17年10月には、医学分館にグループ学習室（利用可能人数：約20名）を設置した。医学分館2階の旧視聴覚室（54m<sup>2</sup>）を転用したのである。平成18年9月までの1年間の利用は、339組（1,324名）で、中央図書館のグループ学習室よりも多く利用されている。平成18年12月には、経済学部分館にグループ学習スペース（22m<sup>2</sup>、利用可能人数：約12名）を設置した。2階の旧新聞閲覧コーナーにパーテーションを取り付け、新しくミーティングテーブル、椅子、ホワイトボードを購入してグループ学習用に改装した。平成19年度には63組（335人）の利用があったが、他の館と比べて、利用率はやや低いと言える。

以上のように、学生のニーズをもとに、まずは中央図書館、各分館ともにグループで学習するスペースを確保した。この状態で、各館の使用状況を観察したり、翌年度以降の学生懇談会において学生から意見を得たりすることによって、学生による評価と更なるニーズを明らかにし、これをもとに次の整備方針を検討した。

###### 4.1.2 学生のニーズに対応した更なる取り組み

中央図書館では、メディアサロンにおける学生の行動を観察することによって、グループが集まりやすい場づくりを考える必要があると考えた。そこで、平成18年度に予定していた放送大学との合築によるフロア増設のときに、学生自身が自由に空間を設計できるライブラリーラウンジ（107m<sup>2</sup>）を設置した。このラウンジでは、窓際のカウンター席以外のテーブルと椅子をすべてキャスター付きにし、複数

のテーブルを組み合わせるグループで学習や相談ができるようにした。また、閲覧室内の一角にある応接セットでグループ学習をしたり話し込んだりする学生が多かったこと、学生懇談会で「館内にくつろげる空間がほしい」（平成18年度・中央図書館）という意見があったことを考慮して、ラウンジ用のテーブルとソファを2セット整備した。

このラウンジがオープンしたのは平成19年6月である。オープン直後には利用する学生は一部に限られていたが、徐々に多くの学生が利用するようになった。15時の時点における在席者数の1か月の累計は、平成19年6月は328名、平成20年6月は659名であった。館内の他の空間とは明らかに異なる活気のある賑わいがあり、「友人、仲間と話したい」という学生がラウンジを利用するようになった。朝から待ち合わせて学習する学生のグループも見られる。ラウンジの設置によって、図書館内に静と動のゾーニングができたといえる。

一方、最初に設置したグループ学習室の利用について、平成19年度には234組（1,004名）とほぼ前年並みの利用があったが、平成20年度には92組（417名）に激減している。その理由として、学生の学年進行による入れ替わりにより、入学時からライブラリーラウンジを利用することが一般的になってきたために、必ずしも快適な環境であるとは言えないグループ学習室を利用しようとする学生が減ったことがあると考えられる。多くの学生がライブラリーラウンジを利用するようになっているが、各グループのプライバシーを確保する必要性を指摘する学生も多い。また、カウンターには、10名程度でグループ学習をしたいという学生の相談も多く寄せられた。10名程度というのは、長崎大学における初年次の必須科目である「教養セミナー」のクラスのサイズと同じである。このセミナーでは、グループで調査・発表する機会が与えられている。そのために、空調とパソコンを利用できる環境を備えた約10名のグループが利用できる区切られた学習室の整備が必要であると考えた。これを実現するために、平成21年2月に、情報コンセントルームの一部を間仕切りして、新たなグループ学習室（約20m<sup>2</sup>）を設置した。また、ニーズとして挙がっていたホワイトボードについてもグループ学習室用の備品として購入して、この学習室に整備した。今後は、利用しやすい予約方法など、グループ学習室のよりよい運用のあり方を検討する必要があると考えている。

医学分館では、平成18年度の学生懇談会において、「グループ学習室に仕切りを設け、2グループで利用できるようにしてほしい」というニーズが明

らかになった。これを実現するために、平成18年12月に可動式の間仕切りを設置する工事をして、2つのグループ学習室として利用できるようにした。ひとつはLサイズ（36m<sup>2</sup>）の部屋で、約10名が利用できる。もうひとつは、Sサイズ（18m<sup>2</sup>）の部屋で、約5名が利用できる。また、グループ学習室でパソコンを使用したいというニーズがあったために、各部屋に情報コンセントを設置した。その結果、平成19年度の利用者は676組（3,197名）、平成20年度の利用者は677組（3,524名）と、有効に活用されるようになった。

経済学部分館では、平成18年度にグループ学習スペースを設置したときに、電源、ホワイトボード、スクリーン、ハブを整備した。平成19年度には、情報コンセントも設置した。この学習スペースがあまり利用されなかったために、スペースの有効利用を考えて、グループ学習室として利用されない時間帯には、情報コンセントコーナーとして利用できるようにした。ただ、同分館は非常に狭隘なため、平成20年8月以降には、学習スペースが一時的に図書目録の遡及入力作業スペースとして使用され、現在はグループ学習用のスペースがない状態となっている。

#### 4.2 改善の事例：開館日・開館時間

学生懇談会では、その開始時より開館日の増加、開館時間の延長に関するニーズが多くあった。

附属図書館では、学生懇談会を開始した平成15年度には、すでに開館時間を延長していた。具体的には、中央図書館で休業期以外の日曜・祝日開館を実施したり、経済学部分館で平日の夜間開館を20時から21時30分に延長したり、日曜開館（13時から17時まで）を試行したりしていた。また、医学分館は21時まで開館しており、医学分館の分室である病院図書室の24時間開館を実現させていた。

中央図書館では、平成16年度の学生懇談会において、「20時の閉館時間（平日）を21時か22時に繰り下げてほしい」というニーズがあった。また、「土曜・日曜・祝日の閉館時間を20時か21時に繰り下げてほしい」、「試験期間中の開館時間を9時から8時か8時30分に繰り上げてほしい」というニーズを得た。これらのニーズに応えるために、中央図書館では、平成17年2月の試験期間中に閉館時間を繰り下げるという試行をした後に、平成17年4月から平日（休業期を除く）の閉館時間を20時から21時45分に繰り下げた。

平成17年度の学生懇談会でも、引き続き、朝の開館時間の繰り上げ、土・日・祝日の開館時間の延

長、試験期の開館時間の延長、休業期の土・日・祝日開館に関するニーズが明らかになった。そこで、平成18年4月には、平日の開館時間を9時から8時40分に繰り上げ、休業期の土・日・祝日開館を開始した。

平成18年度の学生懇談会では、土・日の開館時間の延長（18時から19時頃まで）、朝の授業前の開館（8時ごろ）、平日深夜の開館、24時間開館などのニーズがあった。平成19年7月には、試験期の土・日について閉館時間を18時30分まで繰り下げ、平成20年7月には休業期を除く土・日・祝日の開館の時間帯を10時から18時30分までに延長した。また、平日（休業期を除く）の開館の時間帯を8時40分から22時までに延長した。

平成20年度の学生懇談会では、朝の開館時間について「平日の朝はもう少し早く開館してほしい」、「土・日・祝日も8時40分から開館してほしい」などのニーズが明らかになった。夜間については、「夜の12時まで開館してほしい」、「試験期の開館時間を延長してほしい」などの意見が出る一方で、「夜間延長はもう充分」との意見にうなづく参加者も多かった。

医学分館では、平成16年4月から日曜・祝日も開館していた（10時から17時まで）。平成16年度に医学分館で開催した学生懇談会では、開館時間の延長が高く評価されていることが明らかになった。ここでは、更なる開館時間の延長に関するニーズはなかったために、学生のニーズに十分に対応したといえる。その後、平成18年度、平成19年度の学生懇談会では、土・日・祝日の開館時間の延長に関するニーズが明らかになったために、平成20年10月から、土・日・祝日の開館時間帯を10時から18時30分までに延長した。平成20年度の学生懇談会では、試験期間中の土・日・祝日について夜間まで開館してほしいという更なるニーズが明らかになっている。なお、医学分館については、国家試験の受験者の学習を支援するために、学期中と春季、夏季等の長期休業期の区別をせずに、一年を通して開館時間を延長している。

経済学部分館では、経済学部の「夜間主コース」<sup>16)</sup>への対応という特別の事情をもっている。このコースの授業の時間帯は18時から21時10分までである。そのために、経済学部分館では、これまでも21時45分まで開館していたが、平成17年度・平成18年度の学生懇談会において、「夜間主コースの学生のために、開館時間帯を30分程度延長してほしい」というニーズがあることが明らかになったために、平成18年4月から閉館時間を22時15分に繰り

下げた。

また、平成18年度の学生懇談会では、「社会人の大学院生のために、日曜日についても土曜日と同様に午前中から開館してほしい」など、日・祝日の開館時間に関するニーズが明らかになった。そこで、平成20年10月から、それまでには休館としていた祝日と、休業期の日曜日を開館することとして、開館の時間帯も10時から18時30分までに延長した（休業期は10時から17時まで）。

以上のように、開館日を増やし、開館時間を延長した結果、平成15年度における中央図書館の年間の開館日数は308日、開館の総時間は2,967時間であったが、平成20年度には、開館日数は348日、総開館時間は3,784時間となった。その結果、入館者数は年々増加し、貸出冊数も全体的に少しずつ増加していることが明らかになった<sup>17)</sup>（表3、図1～2）。

## 5. 学習支援環境の整備を可能にした要因

### 5.1 学長と附属図書館長のリーダーシップ

平成14年10月に就任した学長（当時）は、平成15年4月の図書館長の交替にあたって、学部の持ち回りであった従来の図書館長の人事を廃し、工学部の岡林隆敏教授を任命した。その理由として、岡林教授がそれまでに附属図書館の研究開発室の室員として古写真データベースの開発に積極的に取り組んでいたことがある。学長は、岡林教授を図書館長として任命した時に、附属図書館の改革を強く指示した。更には、学長は、5.2で説明するように、新たな予算枠を設置することによって、附属図書館における学習支援環境の整備を支援した。

岡林館長が着任する以前の図書館運営では、図書館長は、図書館職にある事務部門の管理職が作成した改善案を運営委員会に諮って承認を受け、これを受けた図書館員が図書館の業務を遂行していた。だが、岡林館長は、図書館内外において広くリーダーシップを発揮し、附属図書館内の課題に直接関与して解決したり、新たなプロジェクトを推進したりした<sup>18)</sup>。

そのひとつが、学生懇談会を実施し、図書館長が学生のニーズに直接耳を傾けることであった。そして、ここで明らかになったニーズについて図書館長がその場で学生に対応を約束し、図書館員に指示をすることであった。更には、図書館長命により各学部の図書館委員に各学部の学生懇談会の開催を要請するなど、教員の力を図書館の運営に広く活用することであった。

表3 長崎大学附属図書館のサービスと利用状況の推移  
(平成15年度～平成20年度の年間開館日数・総開館時間・入館者数・貸出冊数)

館名	年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
中央図書館	開館日数	309日	332日	324日	332日	354日	348日
	開館時間	2,980時間	3,131時間	3,359時間	3,686時間	3,736時間	3,784時間
	入館者数	284,837名	297,309名	319,619名	289,398名	367,657名	382,632名
	貸出冊数	36,963冊	35,205冊	35,580冊	34,463冊	37,021冊	38,151冊
医学分館	開館日数	290日	345日	348日	347日	350日	345日
	開館時間	3,229時間	3,597時間	3,616時間	3,626時間	3,695時間	3,890時間
	入館者数	104,207名	112,570名	115,949名	123,075名	117,886名	120,435名
	貸出冊数	12,889冊	13,995冊	14,688冊	15,248冊	15,593冊	16,394冊
経済学部 分館	開館日数	300日	317日	315日	319日	315日	325日
	開館時間	3,094時間	3,223時間	3,247時間	3,337時間	3,464時間	3,647時間
	入館者数	49,238名	55,942名	48,142名	50,899名	61,043名	64,273名
	貸出冊数	8,191冊	8,355冊	6,673冊	6,917冊	6,677冊	6,832冊
3館平均	開館日数	300日	331日	329日	333日	340日	339日
	開館時間	3,101時間	3,317時間	3,407時間	3,550時間	3,632時間	3,774時間
3館合計	入館者数	438,282名	465,821名	483,710名	463,372名	546,586名	567,340名
	貸出冊数	58,043冊	57,555冊	56,941冊	56,628冊	59,291冊	61,377冊

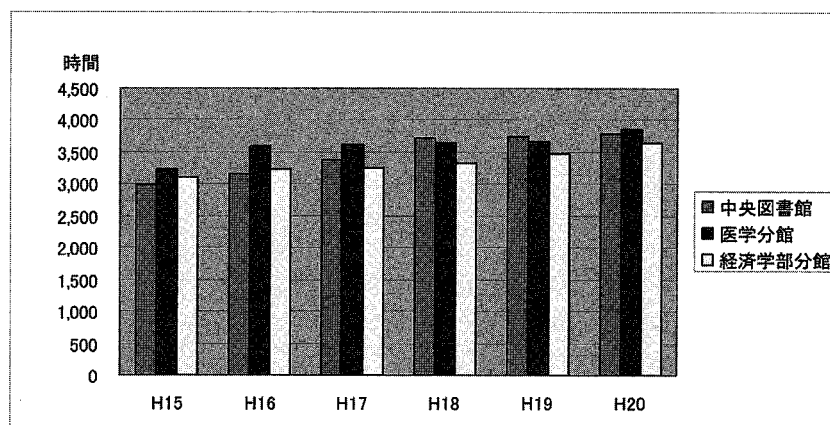


図1 年間の総開館時間の推移

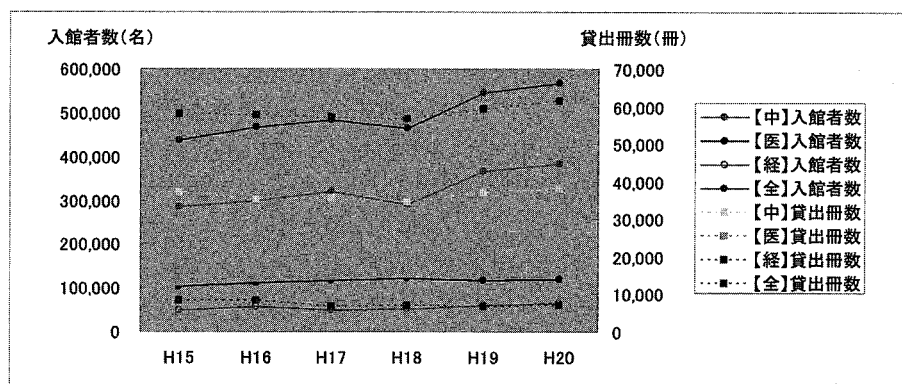


図2 入館者数と貸出冊数の推移

## 5.2 予算の共通経費化

学習支援環境を整備するためには、予算の裏づけが不可欠である。法人化以前には、附属図書館は、単独で予算が割り当てられるのではなく、各学部等に割り当てられた予算から必要分を移替されることによって運営費を得ていた。この方法では、附属図書館の裁量によって予算を使用できないために、新事業を開始するのは難しかった。だが、法人化以降には、附属図書館にも予算が直接割り当てられるようになった。そのために、学習支援環境の整備のために予算を使用することができた。

また、学長裁量経費によって、学習支援環境を整備するために更なる予算が配分され、グループ学習室、AVコーナーなど多くの施設・設備を整備することができた。これは、長崎大学の執行部が、文部科学省からの運営交付金が減額されるという状況のもとで教育水準を落とさない方法を考え、学生から強いニーズのある学生用図書の実質、図書館の開館時間の延長を実現させることが重要であると判断したためである<sup>19)</sup>。そして、附属図書館における学習支援環境を整備するため、平成17年度に「学生学習環境支援経費」の新規計上を決定した。

資料費についても、学生用の図書費を学部の予算からの移替で賄っていた時には、予算に応じた推薦枠を学部に戻して選書を依頼していたために、学生自身が希望する図書を購入する費用が充分になかった。しかし、学生用図書費が附属図書館の予算として配分されるようになったために、学部の枠にとらわれることなく、学生にとって必要な資料を効率的に収集することができるようになり、学生のリクエストにも十分に応えられるようになった<sup>20)</sup>。

## 6. 今後の課題

以上のように、附属図書館では、学生懇談会において明らかになった学生のニーズを取り入れて学習支援環境を整備してきた。その結果、図書館の利用に関する学生の満足度が高まったり、グループ学習のための場をはじめとする附属図書館の利用者が増えたりしていることが明らかになった。更には、学生懇談会において、学生がより発展的なサービスを期待するようになっていくことも明らかになった。より発展的なニーズの例として、24時間開館、貸出冊数の上限の引き上げ、飲食用スペースの設置、携帯電話の利用スペースの設置などがある。今後も、多様な学生のニーズを取り入れて学習支援環境を整備しながら、次に示す課題に取り組むことが重要になると考えている。

- 発展的なニーズへの対応策を検討する
- 附属図書館が計画している取り組みに関する学生のニーズを把握する
- 効果的な広報のあり方を検討する
- 学生のニーズへの対応の積み重ねによって学生志向のサービスを提供する機関であるという信頼を獲得する
- 附属図書館における学習支援環境の整備が学習成果に与える影響を分析する

まずは、「発展的なニーズへの対応策を検討する」について、具体的には、試験期における座席の増設、中央図書館におけるグループ学習室の設備及び運用方法の改善、飲食用のスペースの設置について必要性を検討することなどである。その理由は、発展的なサービスについて学生懇談会で検討した時に、学生間において賛否両論の意見があることが明らかになったためである。学生のニーズを根拠にして学習支援環境を整備するためには、学生懇談会において得たニーズにどれだけの支持があるのかを明らかにすることが必要になる。そのために、学生懇談会と併せて、学生を広く対象としたアンケート調査を実施し、そのニーズに多くの支持が得られることを確認した上で実現に結びつけることが望ましいと考えている。

次に、「附属図書館が計画している取り組みに関する学生のニーズを把握する」について、すでに提供しているサービスだけでなく、計画中のサービスについても事前に学生のニーズを明らかにすることが重要であると考えている。附属図書館の建物は老朽化が進んでいる。中央図書館が建設されたのは1971年、経済学部分館は1972年、医学分館は1978年である。今後は、建物自体の改築が必要になると考えられる。建物の改築時に新たな学習支援環境のコンセプトを決める際にも、何らかの方法によって学生のニーズを反映させることが重要になる。そのために、特定のテーマに特化した学生懇談会やアンケート調査を実施して事前に学生のニーズを明らかにしておくことが必要になると考えている。

次に、「効果的な広報のあり方を検討する」について、学生懇談会に参加する学生はこれまでは主に図書館委員である教員の推薦等によって選出していたが、公募等により希望する学生が広く参加できる体制を整備することが必要になると考えている。平成19年度・平成20年度には、中央図書館の学生懇談会に参加する学生を附属図書館内及び学部の掲示板にポスターを掲示したりチラシを配布したりして募集をした。だが、応募者を得られなかった。選書

ツアーなどのイベントについても、ポスターの掲示やチラシの配布、ホームページ上の案内などによって募集しているが、多くの学生が競って応募するものではない。学生懇談会についても選書ツアーについても、参加した学生に実施した事後アンケートでは高い評価を得ているので、学生がいったん参加すれば附属図書館が提供するサービスや対応に満足感を得る可能性が高いことがわかっている。附属図書館のサービスを理解し活用してもらうために、まずは附属図書館が主催するイベント等への参加者を増やすことが重要である。効果的な公募の方法や広報のあり方を検討することが重要な課題のひとつであると考えている。

次に、「学生のニーズへの対応の積み重ねによって学生志向のサービスを提供する機関であるという信頼を獲得する」について、学生懇談会の参加者を始めとして、附属図書館が学生志向のサービスを提供する機関であるという学生からの信頼を得ることが重要になる。これまでに、学生のニーズを反映した改善の中で最も小さなもののひとつは前述の学生希望図書のリクエスト用紙の改善であった。学部が主催する学生懇談会において、ある学生が「学生希望図書の用紙が堅苦しくて書く気になれない」という発言をした。そこで、附属図書館では、リクエスト用紙のタイトルを「学生希望図書購入申込書」から「学生希望図書リクエスト用紙」に変更し、枠線の色を黒からマゼンダに変更し、小さなイラストを挿入した。記入内容の変更はない。この様式の変更に要した時間は試案の作成を含めて1、2時間である。同年度の文教地区の学生懇談会に学部の代表として出席して、配布されたリクエスト用紙を見たその学生は「自分の意見が本当に実現すると知って嬉しい」と喜んだ。

学生懇談会に参加した学生は、このような対応の積み重ねにより、「学生懇談会における発言は図書館に受け入れられている」、「学生のニーズによって図書館を変えることができる」という認識を持つようになっていくようである。だが、学生懇談会の参加者が少ないことから、多くの学生がこの認識を持つには至っていないのが現状である。附属図書館が学生志向のサービスを提供する機関としての信頼を得るためには、まずは学生懇談会に参加した学生をはじめとする一人ひとりの満足度の向上を目指してこれを積み上げていくことが重要である。

最後に、「附属図書館における学習支援環境の整備が学習成果に与える影響を分析する」ことは、大学図書館における学習支援環境の整備が教育の質の保証に貢献することを証明することになるために、

たいへん重要である。1998年に出された大学審議会の答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について：競争的環境の中で個性が輝く大学」では、1単位あたり教室内外における45時間の学習時間を確保するという単位の実質化を実現するために、アクティブ・ラーニングを導入したり、履修登録の上限を設定したり、成績評価基準を厳格化したりすることに加えて、授業（教室）外の学習環境である「図書館など学習環境を整備する」ことの必要性を指摘している。これは、単なる座席数の増加ではなく、サービスなどその運用も含めた広い学習支援の環境を整備することによって授業（教室）外学習の実質化を支援する必要性を指摘したものであると言える。

附属図書館では、学生のニーズを反映させながら授業（教室）外学習の実質化に重要になる学習支援環境を多面的に整備してきた。だが、整備した学習支援環境がどれほど学習成果を向上させたのかを検証するのはこれからである。附属図書館における学習支援環境の整備をさらに進めながら、これと学習成果の関係を分析することが今後の最重要課題である。これを明らかにしたときにこそ、大学教育の質の保証に大学図書館が貢献していることを証明することができると考えている。

#### 注・参考文献

- 1) 例として、長崎大学「学生と学長との懇談会」『CHOHO』Vol.11, 2005.4, p.6-7.
- 2) 大学における学生生活の充実に関する調査研究協力者会議「大学における学生生活の充実方策について（報告）：学生の立場に立った大学づくりを目指して」（2000.6.）[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm)（最終確認：2009.4.29.）
- 3) [http://www.jasso.go.jp/gakuseisien\\_gp/gakuseisien\\_gp\\_resulth20.html](http://www.jasso.go.jp/gakuseisien_gp/gakuseisien_gp_resulth20.html)（最終確認：2009.6.27.）
- 4) 例として、筑波大学の「共創的コミュニティ形成による学生支援：学生・教職員が一体となった新たな自主的活動の創生」がある。[http://www.jasso.go.jp/gakuseisien\\_gp/documents/tsukuba\\_p\\_p1.pdf](http://www.jasso.go.jp/gakuseisien_gp/documents/tsukuba_p_p1.pdf)（最終確認：2009.6.27.）
- 5) 郷原正好が、2008年6月に実施した国立の24大学を対象とする電子メールによる「学生との懇談会に関するアンケート調査」にもとづいている。
- 6) 平成21年5月1日現在「長崎大学のいま」[http://www.nagasaki-u.ac.jp/guidance/gui\\_main.html](http://www.nagasaki-u.ac.jp/guidance/gui_main.html)（最終確認：2009.6.22.）
- 7) 長崎大学「学長メッセージ：長崎大学と「学生顧客主義」」<http://www.nagasaki-u.ac.jp/guidance/message/message15.html>（最終確認：

- 2009.3.2.)
- 8) 国立大学法人長崎大学中期目標 <http://www.nagasaki-u.ac.jp/plan/chuki/chukimokuhyo20.pdf> (最終確認: 2009.3.2.); 国立大学法人長崎大学中期計画 <http://www.nagasaki-u.ac.jp/plan/chuki/chukikeikaku20.pdf> (最終確認: 2009.3.2.)
  - 9) 平成16年度国立大学法人長崎大学年度計画 <http://www.nagasaki-u.ac.jp/plan/chuki/h16nendokeikaku.pdf> (最終確認: 2009.3.2.)
  - 10) 附属図書館全体の学生用図書費は3つの館に配分される。毎年実施していることではないが、医学分館では、配分された学生用図書費の一部を用いて学生図書委員が選書する。
  - 11) 「図書館における学生との懇談会報告」『和華蘭の窓: 長崎大学附属図書館報』, No.94, 2005.3, p.5-6.
  - 12) [用語説明] 文教地区委員協議会の委員長: 図書館委員のうち、中央図書館のある文教キャンパスにある部局から選出された委員の代表として、館長、分館長とともに附属図書館執行部を形成する。
  - 13) 「図書館における学生との懇談会報告」「学生懇談会の意見・要望に応じて」『和華蘭の窓: 長崎大学附属図書館報』No.94, 2005.3, p.4-6.
  - 14) 岡林隆敏「利用者から信頼される新しい時代の大学図書館づくり」『和華蘭の窓: 長崎大学附属図書館報』No.94, 2005.3, p.2-3.
  - 15) 「ぶらりらいぶらり: 長崎大学図書館ブログ」<http://nulib.blog7.fc2.com/> (最終確認: 2009.6.23)
  - 16) 長崎大学経済学部パンフレット, p.15. [http://www.econ.nagasaki-u.ac.jp/introduction/booklet\\_09.pdf](http://www.econ.nagasaki-u.ac.jp/introduction/booklet_09.pdf) (最終確認: 2009.6.15)
  - 17) 平成18年度の減少は、工事による部分的な閉館、騒音等によるものと考えられる。
  - 18) 例として、『長崎大学附属図書館あり方懇談会報告書』2006, 23p.
  - 19) 齋藤寛「勉強環境を高めます! : 「学生顧客主義」をかかげる大学としての苦渋の選択」『大学の窓から』2007, 長崎文献社, p.178-179. (長崎文献ライブラリー, 003)
  - 20) 柴多一雄「学生用図書の新しい収書方法について」『和華蘭の窓: 長崎大学附属図書館報』No.93, 2004.12, p.1-2.

---

<2009.5.3 受理 しばはら ともみ 長崎大学附属図書館事務職員 (図書館員), ごうはら まさよし 信州大学附属図書館副館長 (事務担当), ながさわ たよ 三重大学高等教育創造開発センター准教授, しばた かずお 長崎大学附属図書館館長>



**SHIBAHARA Tomoni, GOHARA Masayoshi, NAGASAWA Toyo, SHIBATA Kazuo**

**The Reform toward Student Oriented Learning Environments in University Libraries : Based on the Results of Student Focus Group Interviews Conducted by Nagasaki University Library from 2004 to 2008**

**Abstract:** In recent years, the importance of reflecting students' expectations and opinions into university operations has been pointed out in Japan. The purpose of this report is to explain the process and the results which the university library has changed the learning support environment based on students' expectations and opinions through student focus interviews conducted by Nagasaki University Library between 2004 and 2008. As the results of renovations to the learning support environment in areas such as facilities, materials and services, student satisfaction levels increased as did the number of library users each year. Furthermore, it was clear that students have come to expect even more innovative services.

**Keywords:** learning support environments / learning support systems / student focus group interviews / Nagasaki University Library / university education reform